

洛書

物置きの油画

石本 健太



その果物の静物画は叔父が描いたものである。捨てることができなかつた、と申し訳なさそうに父の実家の物置きに置かれていた。子供心に、画家の叔父の生き方に憧れた。田舎のサラリーマン家庭に育った私には、年に一度東京からやってくる（普段の仕事の様子が想像できないと言う意味で）得体の知れない、とても優しい人であった。他の人には見えない何かが見えているように感じられ、なんだか格好良かった。自身の作品についてはほとんど何も語ってくれなかつた。絵も音楽も、芸術方面の才能が欠片も無い私には、芸術の世界はよく分からない遠い異国のままである。

何か他の人と違うこと、まだ名前のついていない何者とも表現できないようなことがしたい、という思いが時折顔を覗かせるのは、そんな叔父の影響かもしれない。いつだったか、叔父が実家に遊びに来た際に、妹とふたり美術館に連れて行ってもらった。ピカソやウォーホルを見た記憶は残っている。その中で、はっきりと思い出せないのだが、いわゆる現代アートと呼ばれる類の「なんか糸がビョーンってなってるだけの作品」が展示されていた。いままでこれが芸術だと誰も気づいていなかったことを作品にしたことが凄かつたんだ、と説明してくれたのを覚えている。

今は、水中を泳いでいる生き物、特に単細胞生物の動き、について研究している。生き物を取り囲んでいる流体に関する方程式をあこれと観察する。数理的な構造から見えてくる生き物と周囲の環境を、一体として描き出そうとしている。ひょんなことから取り組み始めたこのテーマは、学生時代からさほど変化がない（と世間には思われるだろう）。そういえば、叔父もいつからか、小屋をモチーフとした絵をひたすら描くようになった。描くことによって新しい一面が見えてくるのだろう。

彫刻や絵画から映画やCG、そして電腦世界へ。新しい技術は新しい表現を可能にした。生き物の流れや動きも、数学理論からスーパーコンピュータ、実際の生き物のハイスピードカメラによる撮影まで、種々の表現手法の合わせ技で未知の世界を見せてくれる。

私のここ数年のメインの研究は「流体を通して見た生き物の形」である。それは目で見た実際の形よりずっとぼんやりしていて、その種類は実に少ないことがわかってきた。例えば、四角形と円は等しいが、三角形とは異なっている。数式を介してしか見ることができない、その形の全容解明が当面の目標である。

叔父は還暦を迎えたばかりだが、画家の世界ではその年齢はまだ若手だという話も聞いたことがある。研究者の世界よりもずっと長い修行が必要なのだろう。なんとなくわかる気もする。いつも少し遠いところにいる分、その背中では遠いままに感じる。私の修行もまだまだ続く。

（いしもと けんた、数理解析研究所准教授、専門は応用数学・流体力学・数理生物学）

[目次に戻る ↗](#)